モールの想像力

写真家・ライター　大山顕（おおやま　けん）

Essay 時の調べ

典型的なモールの動線は基本的に大きな1本の通路で作られている。しばしば「ストリート」と名付けられるその通路の両脇に店舗が並ぶ。これは商店街に似ている。かつて、古き良き商店街と大規模商業施設は対立するものとして語られたりもしたが（大店法の成立経緯と時期を考えると、これは正確ではない）、ぶらぶら歩きを可能にする、という形式からみればモールは商店街の正統な後継者だ。

中心市街地の衰退とモータリゼーションによって生活圏が郊外化した結果、街を歩くということが難しくなった地方がたくさんある。家を出てすぐに自家用車に乗り込み、バイパスを走ってモールの駐車場へ。家から出てはじめて歩くのは、モールに入った時。いわば、リビングの延長である車内を経由して、モールのエントランスは玄関に「直結」している。モールは「街」を肩代わりしているのだ。

「現代的モールの父」と呼ぶべき建築家ジョン・ジャーディは、自らのデザインの目的をこう語っている。「伝統的な集合という街のオーダーは破壊されてしまった。かつてはひとつひとつの集合体であったが、いまはアッという短期間にバラバラの部分になったものを、もう一度新たにひとつに結び付け、元のような街に戻すことにチャレンジした[注1]」。世界初のモールの設計者といわれるビクター・グルーエンも、郊外居住者たちが家族以外の人と過ごすための空間、つまり、公共性を持った「街」を作ろうとした[注2]。モールはその誕生からいまに至るまで、かつての街路にあった公共性の再現を目指してきたのだ。

実際、現在のモールは、単に商業を担うだけの施設ではない。デイサービスや学習塾、クリニック、役所の出張所などが置かれていたりする。一種の「公共施設」と呼べるだろう。

現在、オンラインショッピングの隆盛によって、物理空間における買い物の形式が曲がり角に立たされているわけだが、買い物の楽しみとぶらぶら歩くことのつながりはもともと自明ではない。歩くことを楽しみとして発見し、それを消費と結び付けたのは近代以降の都市ブルジョアジーによる発明だ。一方で、街を歩き人と行き交うことがもたらす公共性はもっと根源的なものだ。オンラインショッピングは、買い物が副次的に生みだした公共圏を代替しない。インターネットが登場した時、僕も含めて多くの人びとがそれを期待したが、残念ながらそうはならなかった。まだ僕らは、身体を移動させることによってしか公共的に振る舞えないのだろう。SNSにおけるコミュニケーションの焼け野原を見るたびにそう思う。

現在の40歳代以下はいわばモールネイティブ世代だ。特に地方では、モールが青春の舞台だったはずだ。僕が「モールの想像力―ショッピングモールはユートピアだ」と銘打って展覧会を開催した（下記参照）のは、生活と文化のインフラとして欠かせないものになっているモールを、見つめ直すべきだと思ったからだ。

モールの形式は世界中で共通している点も重要だ。アメリカでも、サウジアラビアでも、ロシアでも、ウクライナでも、モールは同じように「ストリート」で構成され、似たようなテナントが入り、人びとは似たような温度・湿度環境で過ごす。民族やイデオロギーを超えて、モールネイティブは共通する経験を持っている。いわば「モール共和国」が世界中に小さな領土を持っている。

いま、モールについて深く考えるべきだと思う。そのことによって現在の社会を深くとらえることができるはずだ。

（注1）『プロセスアーキテクチュア』第一〇一号「ジャーディ・パートナーシップ―共有社会的体験の再創出」1992年
（注2）『都市と消費とディズニーの夢―ショッピングモールライゼーションの時代』速水健朗、角川書店、2012年

キーウのモール「GLOBUS」の吹き抜け

略歴
工業地域を遊び場として育つ。千葉大学工学部を卒業後、松下電器産業（現 Panasonic）に入社。シンクタンク部門に10年間勤めた後、写真家としての顔も持つ。団地研究家としての顔も持つ。執筆、イベント主催など多様な活動を行っている。『ショッピングモールから考える』（東浩紀・大山顕著、幻冬舎新書、2016年）など著書多数。

展示情報

**「モールの想像力
――ショッピングモールはユートピアだ」展**

会　　場：髙島屋史料館TOKYO
所 在 地：東京都中央区日本橋2丁目4-1
　　日本橋髙島屋S.C.本館4階
会　　期：2023年3月4日（土）～8月27日（日）
　　※休館：月・火
開館時間：11:00～19:00
入 館 料：無料